令和8年熊本地震
DMAT派遣活動報告



独立行政法人　国立病院機構　岡山医療センター DMAT隊
〇眞田　尚輝　：臨床検査技師

1.活動チーム概要

活動期間：2026年8月1日（土）～8月6日（木）

移動経路：岡山医療センター ⇔ 熊本県現地本部

活動場所: 熊本県（済生会熊本病院、宇城市内保健所・避難所・福祉施設エリア）

● チーム編成
医師（1名）
看護師（2名、内1名DMATコーディネーター）
臨床工学技士・臨床検査技師（各1名）

久住　倫宏　：医師（腎臓移植外科）
小林　和歌子：看護師（DMATコーディネーター）
照屋　樹　　：看護師
大野　開成　：臨床工学技士
眞田　尚輝　：臨床検査技師

＊後方支援
薬剤師（２名）

後方支援
國定　誠也　：薬剤師
唐川　雅生　：薬剤師

周辺のインフラ状況:
激しい揺れによる道路の陥没や荒れた路面・細い路地が多く存在。
観測史上・現地最高気温40.3℃を記録する過酷な猛暑下で、一部断水や停電、インフラ機能の低下が発生。

1. CSCA

Command (指揮)

- 活動拠点本部

県央南活動DMAT拠点本部
（済生会熊本病院内）
「宇城社会福祉協議会」
との指揮系統・連携体制

Safety (安全)

- 余震に備える
  個人装備の確認
- 熱中症対策
  冷却ベスト着用と交代制休憩で熱中症を徹底予防。

Communication

- 情報伝達の三層構造
- Starlink Miniとスマートグラスでの情報共有。

Assessment

- 避難所や福祉施設のラピッドアセスメントを実施。



図1.県央南活動DMAT拠点本部（済生会熊本病院内）
災害時の指揮系統（CSCA）に基づき、県央南活動DMAT拠点本部に参画。

1.派遣概要および全行程

活動期間：2026年8月1日（土）～8月6日（木） | **移動経路：**岡山医療センター ⇔ 熊本県現地本部

日程	活動拠点	主な実施業務・ミッション内容
8/1 (土)	移動（岡山 → 熊本）	出発式後、救急車により夜間長距離移動。隊員5名でドライバーを交代しつつ熊本へ。
8/2 (日)	熊本済生会病院	県央南活動拠点本部ミーティング参画。　ER診療支援（13ベッド＋初療室）。
8/3 (月)	宇城保健所エリア	松橋中学校および「なごやかハウス」の施設ラピッドアセスメントを実施。
8/4 (火)	宇城市内 避難所	松橋西防災拠点センター・鴨籠公民館等の避難所スクリーニング・環境調整。
8/5 (水)	宇城社会福祉協議会	活動指揮所　設営支援、電話対応・往診支援体制の構築、後続隊への引継ぎ。
8/6 (木)	移動（熊本 → 岡山）	現地撤収・長距離自走により岡山医療センター帰院。器材点検および帰着式。

現地活動実績（注力した点：チーム運用とICT）

少人数高機動チームによる多目的ミッションの完遂

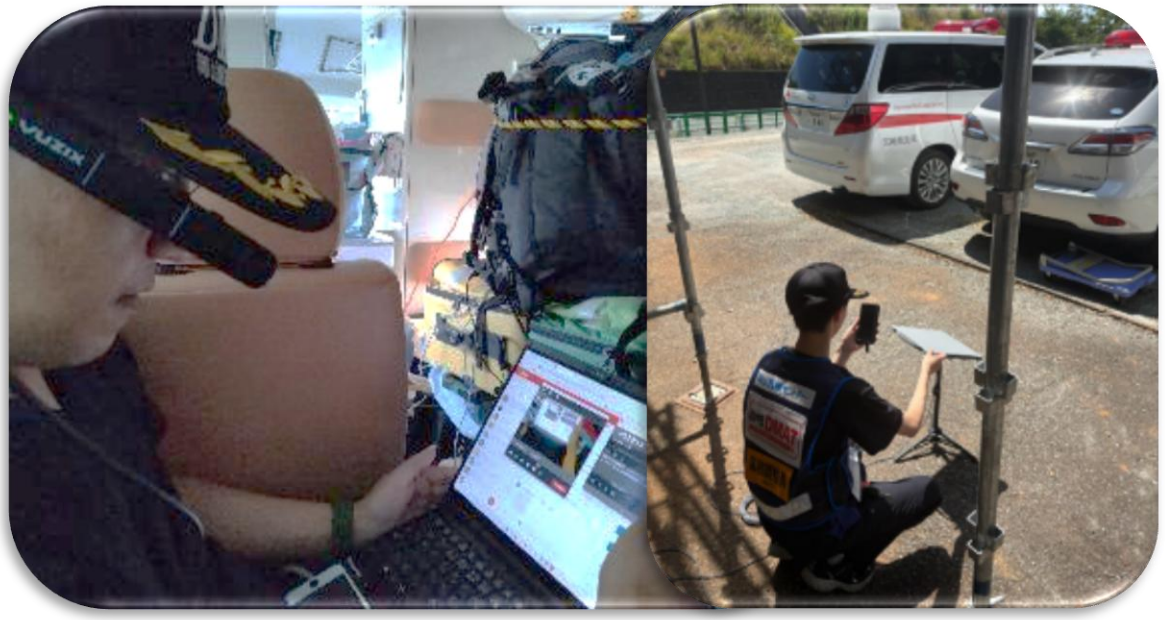
救急車1台に医療・通信・生活物資を集約し、医療支援から避難所・福祉連携、情報管理までを自己完結型で迅速に展開。





ICTの活用

Starlink Mini ＆ スマートグラス（M400）を用いた
リアルタイム情報共有と院内研修
（8/4開催　DMAT/原子力災害研修会）への生中継実施。



現地活動実績(注力した点)

情報伝達の三層構造

即時共有：LINEグループ（写真・クロノロジーの共有）

医療連携：JOIN（病院支援・本部からの情報共有）

広域調整：EMIS（厚生労働省 災害医療情報システムへの登録）

後方支援チームとの密接な連携による支援の実現

ICTの活用

Starlink Mini & スマートグラスの現場導入

- Starlink Mini：

移動走行中および被災地域にてポータブル電源駆動により安定した通信環境を確立

- スマートグラス (M400)：

JOINと接続し、現地映像を遠隔地の後方支援へリアルタイム中継

- 院内還元：

現地から研修会へJOIN生中継を実施

派遣中の問題点（失敗した事・困った事・いざこざ）

宿泊施設の予約トラブル

- 事前確保していたホテルが当日ダブルブッキングにより使用不可となるトラブルが発生。
- 院内後方支援とのリアルタイム連携により、民泊検討を含めた代替宿泊地を急遽再探索。

車両の積載スペースと夏季車載環境の限界

- 隊員5名と大量の生活・医療資機材で救急車内が満載となり、患者搬送時のスペースが圧迫された。
- 猛暑による車内温度上昇で一部薬品・電源の温度管理に苦慮。

資機材のトラブル

- 電子血圧計マンシェットのエア漏れ発生
- 悪路走行による紙箱入りアンプルの潰れが発生。
- AR非対応の旧型スマホ（iPhone 8）ではStarlinkの専用アプリが機能せず、設置位置の確認に難渋。

対応策（失敗した事・困った事・いざこざ）

後方支援との緊密な連携による宿泊確保

- 能登半島地震の経験から、初日は活動拠点本部へ相談しでDMAT待機スペースで宿泊
- 2日目以降の宿泊先確保は、院内の後方支援チームの強力なバックアップにより無事にクリア。

現場での機転と安全管理の徹底

- 前回の熊本地震の経験から、DMAT待機スペースの一部を借用し、車内スペースを確保し患者搬送に対応できるようにした。
- 40℃の猛暑対策として、冷却ベストの着用、車載冷蔵庫を活用したこまめな水分補給、交代制の休憩運用を厳守し熱中症を防いだ。

資機材管理の徹底

- 電子血圧計　エア漏れは、CEによる応急対応。また、トリアージバック内の物品を急遽使用。
- 薬品破損はなかった為、薬剤管理徹底の再周知と再梱包
- セットアップ運用を確立し、ハンズフリーでの情報共有と迅速なアセスメントを実現。

課題と考察①：車両運用・荷物積載・車載環境

項目	現場で発生した問題・課題	今後の改善策・具体的な対応案
救急車1台運用の限界	隊員5名 ＋ 生活物資 ＋ 医療資機材で満載となり、患者搬送時の車内スペースが著しく圧迫された。	現地拠点での「荷物一時置き場」の事前確保。 長距離派遣時はDMATカーとの2台運用も視野に入れる。
夏季車載環境の改善	猛暑による車内温度上昇で、ポータブル電源や飲料、一部薬品の保管環境維持が困難であった。	車載用ポータブル冷凍冷蔵庫、ソーラーパネル、遮光サンシェードを夏期標準装備として追加する。
現場移動用カート	重量物の搬入や避難所内での資機材運搬時、手持ち移動による体力的消耗が大きかった。	折りたたみ式軽量台車を救急車後部に積載する。

課題と考察②：資機材・医療機器・薬品管理

分類	課題と予防・改訂策	
医療機器の劣化トラブル	問題	現地で電子血圧計マンシェットのエア漏れが発生。
	対策	平時点検（耐圧試験）の強化と、アナログ（アネロイド）血圧計のバックアップ常備。
薬品・アンプル保護	問題	悪路走行により紙箱入りアンプルの潰れが発生。
	対策	薬品用アンプルケースを耐衝撃ハードケース（ウレタン内装）へ全量変更。
熱中症対策資材	問題	水冷ベストは初期冷却に効果的だが、ぬるくなった際の重量増が課題。
	対策	運用時間の見直しおよびファン付きウェアとの併用検証。

独立行政法人 国立病院機構
岡山医療センター

後方支援体制について

【内容】

平時からの訓練フローに基づき、出動前からの準備・調整から、活動期間中の連日連夜のロジスティクス調整、情報伝達、院内報告、さらに宿の手配に至るまでバックアップ。



上図：後方支援とのミーティング
右図：後方支援の主な内容

【ミーティング】
日程調整
資料準備
現状分析と情報収集

↓

【準備】
設備予約
資器材及び物品準備
出発式

↓

【実働（訓練）】
安否確認
定時連絡・報告・相談
情報収集
活動報告書作成

↓

【活動終了】
帰着式
デブリーフィング
活動資料作成・整理
院内報告会

【結果】

現地隊が日中の過酷なミッション（診療・アセスメント・調整）に専念できたのは、現地隊と後方支援が一体となった「三層情報共有（スマートグラスによる院内中継含む）」が機能し、組織的な支援の有効性が実証された。

今回の活動での気付き と 今後の備え

【今回の気付き】

- 医療支援に加え、福祉施設や避難所における生活環境調整のニーズが極めて高いこと。
- ICT活用は強力な武器になる一方、事前の動作確認が不可欠であること

【今後岡山医療センターとして準備すべき事】

- 全隊員を対象とした災害用情報システム（EMIS等）の定期実習の計画。
- 猛暑・厳寒期を見据えた隊員の健康管理および継続的なメンタルサポート（デブリーフィング等）。

活動前と活動後の心境の変化

少人数（5名）の救急車1台運用で、

大規模な災害ニーズに対応できるか

という不安やプレッシャーがあった。

活動後のデブリーフィング（現場からの所感）

少人数（5名）の救急車1台運用で、どこまで大規模な災害ニーズに対応できるかという不安やプレッシャーがあった。



久住 倫宏（医師 / 隊長）

「初の試みが多く手探りだったが、T-fal等の車載加熱機器による温かい食事確保など、平時の準備が隊員の士気維持に直結した。今回の様式を標準化したい。」



小林和歌子

「救急車内の積載スペース確保が課題。水冷ベストは快適だが氷・水の補充が途絶えると重荷になるため、代替冷却ツールの選定が必要。」



照屋　樹

「車載用冷蔵庫やソーラー電源の必要性を痛感した。EMIS等のシステム操作は現地到着前のおさらいが非常に重要だと実感した。」



眞田　尚輝

「悪路走行による薬品アンプルの保護対策や、飲料水のバリエーション確保など、細かなロジスティクスが隊員のパフォーマンスを左右することを学んだ。」



大野　開成

「Starlink Miniによる通信確保は現場の安心感に大きく貢献した。今後はポータブル電源管理と安全運用の両立を詰める必要がある。」

活動前と活動後の心境の変化

チーム内の多職種連携と、

院内の強力な後方支援があれば、

限られたリソースでも高い機動力と

質の高い医療・福祉調整が提供できた。

この経験を岡山の災害医療体制の強化に還元していきたい。

ご清聴ありがとうございました

迅速かつ柔軟に対応した派遣隊員5名、ならびに連日連夜ロジスティクスと連絡業務を支え続けた院内後方支援メンバーに心より感謝申し上げます。